

派遣者番号	29K11	氏名	荒井 香織
研究主題 —副主題—	教師の効力感を高める校内研究の工夫・改善に関する研究 —少人数チームによる授業実践・検討の取組を通して—		
派遣先	帝京大学教職大学院	担当教官	中田 正弘
所属校	稲城市立若葉台小学校	校長	濱田 伸

キーワード：教師教育 授業研究 校内研修 同僚性

1 研究の目的と動機・主題設定の理由

本研究の目的は、在籍校を含む市内小学校の校内研究の現状を捉え、改善の方法を提案することである。

研究の動機は、私自身が勤務校の取組から、校内研究の楽しさを味わった経験がある。多忙感は否めなかったが、日常的な授業改善により研究授業が特別なものでなくなった経験から、校内研究を推進する手だてを探りたいという思いをもったことが研究の出発点である。

中央教育審議会は、「学び続ける教員像の確立」のため「校内研修や自主研修の活性化」を挙げている。校内研究を有効に機能させることは、これらの課題を解決する一つの方策である。

今や、職能開発のための教員の研究・研修は生涯学習としての意味合いをもち、専門職としての教員にとって、絶え間ない授業改善は欠くことのできない課題である。

2 研究の内容・研究の方法

(1) 先行研究の整理

(2) 学校における校内研究に関する実態調査

・質問紙調査・抽出校インタビュー調査

(3) 少人数チームによる校内研究の提案

(4) 効果検証のための校内研究における実践

3 研究の結果

(1) 先行研究の整理

校内研究は明治時代から取り組まれ（稲垣・佐藤、1996）学校経営的観点、教育方法的観点等から多くの実践、研究論文が蓄積されている。

本研究では、国立教育政策研究所の報告書、授業研究の活性化や促進に向けて、調査研究を行った論文、都道府県教育委員会の報告書等を選出して読み進め、校内研究の課題と推進要因を次のように整理した。

【校内研究の課題】

- ・教員の多忙感と時間の確保
- ・校内研究の形骸化と日常実践とのかい離

【校内研究推進の要因】

- ・職場の同僚性が校内研究を推進し、校内研究を推進することが同僚性を高める。
- ・効力感の高まりには校内研究が有効であり、効力感の高まりは仕事の満足感を高める。
- ・管理職の働き
- ・複数の推進員の存在

(2) A市「学校における校内研究」に関する実態調査研究

先行研究の整理で見いだした、校内研究の課題や推進の要因が、勤務する自治体の小学校に当てはまるのか検証するため、A市の公立小学校に質問紙調査を行った（平成29年6月）。

<質問紙調査>

対象：A市の公立小学校12校 教員294名

回収率57.8% 有効回答数170

方法：基本情報5項目、校内研究に関する問いを4件法で33項目、自由記述5項目を設定した。

データの分析：Microsoft Excel 2016を用いる。

質問紙調査は、クランバックの α 係数により、信頼性が確認された（ $\alpha=0.981$ ）。

結果はカイ二乗検定により実測値と期待値の間に有意な差があることを確認した。

p 値<0.03。

<質問紙調査の分析と考察>

質問紙調査から、A市の教員は授業改善への意欲が比較的高いこと。校内研究への満足感や効力感には個人差があること。若手教員の校内研究の目的は授業力向上、指導法等個人の力量形成であり、中堅・ベテラン教員の校内研究の目的には、個人の力量形成に加え、人材育成・

校内研究の運営等、組織及び学校運営の視点があることが分かった。

< F小学校とD小学校へのインタビュー調査 >

質問紙調査の満足度の平均が、比較的低かったF小学校と、比較的高かったD小学校に聞き取り調査を行ったところ、以下の要素が影響しているのではないかと考えた。

運営の工夫	研究主題（資質・能力や児童の姿） 時間の確保（働き方改革の中での校内研究推進） PDCA 講師
効力感を高める工夫	役割分担 授業者になる 日常実践化 裁量がある 明日使える校内研究 児童の姿容 共通理解（新規採用、異動教員への手だて含む）
同僚性を高める工夫	共同的な学び（気を遣わずに意見を言える、議論ができる、聞きたいことが聞ける、発言を受け入れてもらえる、反応がもらえる、分からないと言える） 研究主任の働き 学年等を母体としたチーム

図 1 校内研究推進のための要素

中田（2015）を参考に荒井が作成

(3) リサーチクエストの設定

基礎研究から、共同的な学び、学年等のチームによる取組が同僚性を高めることが示唆されたため、校内研究への取組は目的を共有する少人数のチームによるものが望ましいと考えた。

< リサーチクエスト >

- ① 学年又は課題意識を共有するチームを単位とした取組は教師の効力感を高め、校内研究を推進する。
- ② 学年又はチームを単位とした公開授業を導入することで職務と一体化した課題意識の高い活動が可能になる。

(4) 少人数チームによる校内研究の提案

教員の効力感を高める校内研究の実践を目指して提案した取組の全体像が図 2 である。少人数のチームごとに、手だてと目指す児童像を共有し、学年・チーム内公開授業を行う。

少人数チームは図 3 で示す学びのサイクルで短期間に回していく。共通理解の場として、校内研究全体会や全校での研究授業も設定する。学年・チーム内公開授業を「管理職による授業観察」「初任者研修」等と兼ねることができるようになるとともに、指導案は本時の展開を示すのみとする。中堅・ベテラン教員には、授業後の協議会の司会を任せる。

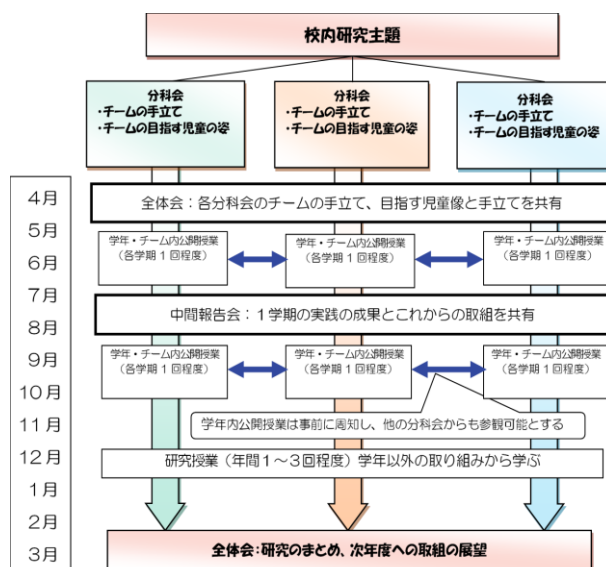


図 2 少人数チームによる校内研究の案

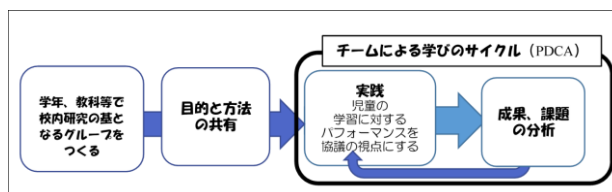


図 3 少人数チームによる学年・チーム内公開授業の取組
(秋田 2002、筒井ほか 2010 を参考に荒井が作成)

(5) 検証のための校内研究実践

本研究で提案する校内研究の実践は、F小学校第1学年と第6学年で行った。実施期間は第1学年が10月～11月、第6学年が10月～12月である。平成29年度のF小学校校内研究の主題に基づき、算数科で学年内公開授業に取り組んだ。

4 研究の考察

実践後の自由記述から個人やチームに裁量があるとよいことや、学びのサイクルを短い期間で複数行うことの良さを見いだすことができた。少人数チームを単位とした取組により同僚性の高まりも確認できた。さらに若手教員の指導力の向上、中堅・ベテラン教員の人材育成への関心・意欲の高まり、研究推進部員の校内研究運営への参画意識の高まりなどの成果があった。

5 今後の展望

今後の課題は、校内研究を推進するミドルリーダーの育成やカリキュラムマネジメントを含めたモデルを追究し、年間を通して取り組むことである。併せて、働き方改革と校内研究の充実の関連を図る取組も課題とする。

